HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小学高学年児童の戸外遊びと遊び場に関する意識 : 札幌市における調査
Author(s)	浅川, 昭一郎; 五十嵐, 芳樹; 葦沢, 拓実
Citation	北海道大学農学部邦文紀要, 13(2), 224-233
Issue Date	1982-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/11975
Type	departmental bulletin paper
File Information	13(2)_p224-233.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小学高学年児童の戸外遊びと遊び場に関する意識

——札幌市における調査——

浅川昭一郎・五十嵐芳樹
(北海道大学農学部花卉・造園学講座)
葦沢拓実
(日本公園緑地協会)

(昭和56年11月2日受理)

Analysis of Outdoor Playing Methods and General Feeling Regarding Playgrounds as Revealed by Quetionaire (3rd～6th grade school children)

—Case study in Sapporo city—

Shyoichiro ASAKAWA and Yoshiki IGARASHI
(Laboratory of Floriculture and Landscape Architecture, Hokkaido University, Sapporo, Japan)
Takumi ASHIZAWA
(Parks and Open Spaces Association of Japan, Tokyo, Japan)

I. 序

従来より，児童公園やその他の遊び場の計画においては，主として，その量的拡大と適正配置が大きな目標とされてきた。これは，急激な都市化やモータリゼーションの進行によって著しく喪失した遊びを可能とする空間の代替を得ることでもあった。

このような目標の下で，我が国における児童公園は近隣住区理論に基づき（1近隣住区に1近隣公園—標準面積2 ha，誘致距離500 m，4児童公園—標準面積2,500 m²，誘致距離250 m），整備が進められ，新しく市街化された地域を中心に一応の進展をみている。例えば札幌市では昭和54年3月現在で児童公園880カ所，面積144.7 haで人口1人当り1.08 m²となり，建設省による目標水準（市街地人口1人当り1 m²）に達している。

しかし，一般的にいって，地価上昇による用地難から広面積を要する近隣公園の整備は遅れ，児童公園に関しても1カ所当りの面積は縮少傾向にあり，札幌市の例では1,000 m²以下の小規模な公園が増加している。

また，児童の遊びは年齢によって発展し，それぞれの段階に応じた遊び場の計画が重要とされている。特に，自然の素材や多様な遊び環境が得難い大都市にあっては，遊戯施設や遊びの素材など質的な特性に関しても充分な検討が不可欠であるが，これまでは量的拡大の影にかくされがちであった。

一方，児童の戸外における遊びが行われるには，遊びを可能とする空間，時間，仲間の存在が大きな条件となり[3]，小学生になると，学習時間が増加し，特に，高学年児童においては通塾などによる自由時間，遊び仲間の減少が戸外遊びの減少にまで影響しているといわれる[5]。

時間や友達などの条件は社会的環境によって規定される面も大きいと考えられるが，遊びは，それらと遊び場，地域環境を含めた条件との相互関連，すなわち，広義の遊び環境の中で成立していると考えるべきで，遊び場の計画においてはそのような環境の中で遊びを把握し，子供達と遊び場との係わりを明らかにしていくことが必要と思われる。

本論文は，社会性の発達と組織化された遊びに特徴づけられ[1,2]，既存の児童公園（多くは，狭く，画一化された遊具）に対して不満が強いと考えられる小学高学年児

童を主な対象として，戸外遊びを規定する条件や遊び場に関する不満を調査し，今後の遊び場整備の参考としようとしたものである。

II. 調査方法

札幌市内の性格の異なった地域を通学区域とする小学校6校について，3年，4年，5年，6年各2クラスの児童を対象として，主として戸外遊び場に関する不満内容を質問紙により調査した。

調査時期は1978年11月であり，気候条件からすると年間でも戸外遊びが少ない季節であるが，利用シーズン中の平均的な遊びを念頭に記入され，満足性等の意識内容に大きな影響を与えているとは考えられない。

調査地区の概要は次の如くで，有効回収数は Table 1 に示した。

北園： 大部分は第2種住居専用地域であるが，一部に住居地域，近隣商業地域，準工業地域を含み，児童公園にも比較的恵まれている。

幌西： 大部分は住居地域で，近隣商業地域も含まれ空地が少なく児童公園配置も充分ではない。

幌東： 市の中心部に近い準工業地域で，空地や児童公園は少ない。

真駒内： 第1種及び第2種住居地域で，計画的に各種の公園が配置され，南東部は丘陵に接している。

盤渓： 市街化調整区域で児童公園はなく，周囲は山林に囲まれている。但し，校区外からの通学生徒が多く含まれている。

常盤： 第1種及び第2種住居専用地域に加え，広面積の市街化調整区域を含む。

また，著者らは1977年9月に札幌市内8小学校区において，3年，6年各2クラス及び父兄を対象として，主として戸外遊びの実態を質問紙によって調査した[4]。本文においては調査IIとして必要に応じてその結果を用いた。

Table 1. Number of responses

School area	Grade and sex								Total
	3		4		5		6		
	m	f	m	f	m	f	m	f	
Kitazono	36	36	34	34	39	43	45	28	295
Kosai	42	32	46	34	43	39	38	30	304
Koto	31	49	51	31	44	32	36	29	303
Makomanai	38	33	33	34	42	43	43	32	298
Bankei	9	5	7	6	3	6	3	4	43
Tokiwa	12	10	12	11	7	8	17	8	85
Total	168	165	183	150	178	171	182	131	1328

III. 結果と考察

1. 戸外遊びの度合

1週間に30分以上戸外で遊ぶ日がどの程度あるかを尋ねると，全体では「週5～6日以上」54%，「週3～4日」25%，「週1～2日」9%，「週1日未満」12%となっている。

ここで，戸外遊びの大部分が1回当り30分以上である[4]ことからすると，この質問における条件とした30分以上にはほとんどすべての戸外遊びが含まれる。従って，この結果から戸外遊びをほとんどしない児童がいることがわかる。

これを，性，学年，校区別にみると，校区による相違は少ないが Fig. 1 が示すように，男子に比べて女子に，また高学年になるにつれて戸外遊びの度合が減少しており，性別相違は高学年において一層大きい。

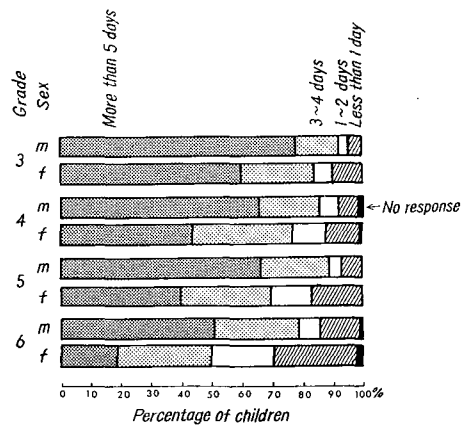

Fig. 1. Number of outdoor play days (over 30 minutes) per week by sex and school age.

次に，戸外遊びにおける充足度を知るために，もっと多く遊びたいか，それとも現状程度でよいかを尋ねた。その結果は，全体の過半数を越える60%が「今のままぐらいでよい」と答える現状肯定型であった。特に，3年男子54%，女子61%，4年男子55%，女子63%，5年男子52%，女子68%，6年男子54%，女子73%と学年よりも性別による差が大きく，女子に現状肯定型が多くなっている。

これを戸外遊びの度合別にみると Fig. 2 のように，「週5～6日以上」とよく遊んでいる子供達にあっても

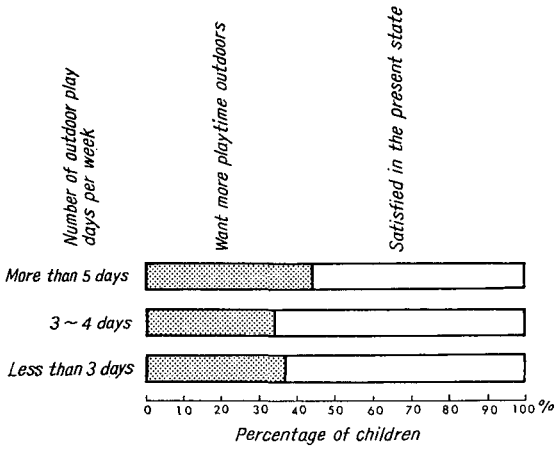

Fig. 2. The attitude (active or passive) to outdoor play as judged by number of outdoor play days per week.

「もっと遊びたい」とする現状不満型が44%と比較的多いのに対し，「週1～2日以下」のあまり遊んでいない児童にあっても現状肯定型が63%と多い。

このように戸外遊びに対する現状肯定層が半数もしくはそれ以上存在し，男子に比べて女子に多いことは既に報告されているが[5]，本調査においては戸外遊びが少ない児童においても現状肯定層が高い比率でみられ，戸外で遊ぶ意欲自体が顕在化していない層が存在することを裏づけているように思われる。

戸外遊びを成立させる条件となる時間，友達，遊び場の有無に関しては Fig. 3 に示すとおりである。

まず，戸外で遊ぶ時間が「少ししかない」に「ほとんどない」を加えた比率は全体で44%で，高学年，特に6年生に，また性別では，男子に比べて女子に高くなっている。この学年による相違には，高学年で存校時間，家庭学習，通塾時間などが増加し，自由時間が減少することによる影響が大きいと考えられ，性別の相違は必ずしも明確ではないが，屋内での遊びに対する志向の強さが関連しているものと考えられる。

一方，校区別相違はそれほど大きくない。しかし，一部には準工業地域で家内工業的企業が多く立地する幌東地区で高い比率を示すなどの地域特性もみられる。

次に，戸外での遊び仲間の存在に関して「少ししかいない」に「ほとんどいない」を加えた比率は全体で43%で，男子に比べて女子に，また，男子では高学年になるにつれてそれぞれ高くなっている。校区別では盤渓，常盤地区など周辺部の生徒数が少ない小学校で高く，低人口密度が影響しているものと考えられる。

遊び場については，遊び場が「近くにある」，「少し遠い」，「大変遠い」に分けて尋ねたが，全体では77%が「近くにある」と答え，半数以上は遊び場が近くに存在することを認めている。「少し遠い」「大変遠い」はそれぞれ21%，1%で両者を加えた比率を，性，学年，校区

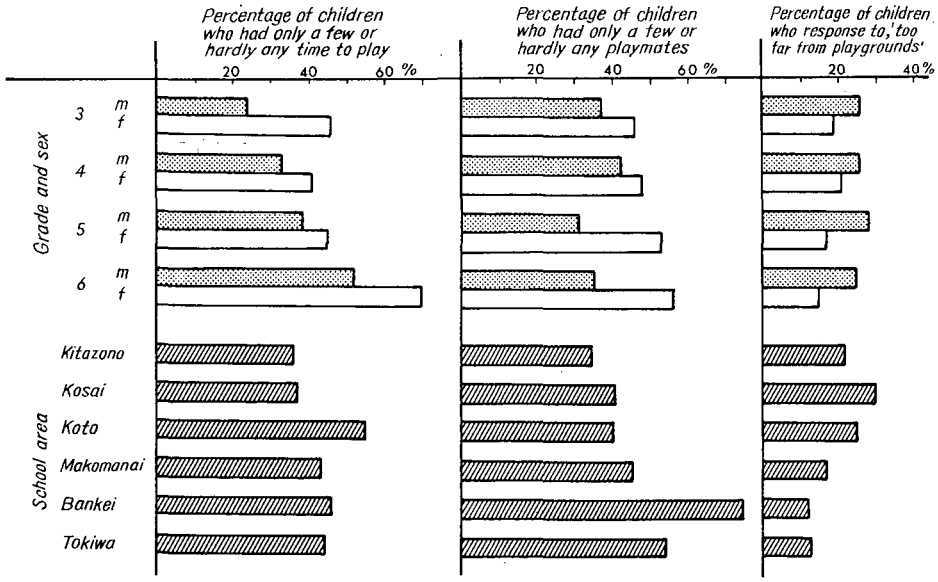

Fig. 3. Relations of the main three factors (time, playmates and playgrounds) and sex, school age and school area.

別にみると，男子にやや高く，学年差はほとんどない。しかし校区別では有意な差が認められ，幌西，幌東など公園や空地が少ない旧市街地で高い傾向がみられる。

また，盤渓や常盤地区においても公園整備は充分ではないが，両地区ともに低比率となっているのは，郊外に位置するため，遊び場となる空地等が存在することや校区外の通学児童によるものと思われる。

一方，戸外遊びの度合は，遊びの時間や友達の有無と密接な関係があり，戸外での遊び時間が少ない児童や，友達の少ない児童は遊びの度合も少なくなっている (Fig. 4)。ここでの時間は，単に物理的な自由時間量ばかりではなく心理的に意識された時間をも考え合わせる必要があろうし，友達の有無に関しては“友達がいないから遊ばない”と同時に“遊ばないから友達もできない”という相互の関連を重視すべきであろう。

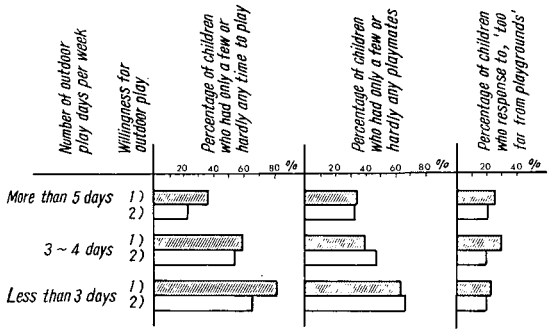

Fig. 4. Relations of outdoor playing activeness and the main three factors (time, playmate and playgrounds).

Note. 1) Want more play time outdoors.
2) Satisfied in the present state.

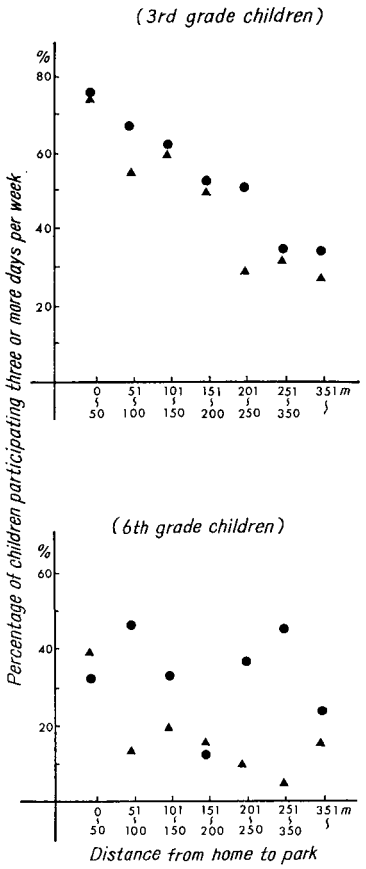

Fig. 5. Relation of distance from home to park and percentage of children participating three or more days per week.

Note. ●: male, ▲: female.

なお，遊び場の遠近と戸外遊びの度合との間には有意な関連はみられず，本調査が行われた校区における遊び場分布状況の下では，遊びの度合を規定する大きな条件とはなっていないものと考えられる。

この点について調査IIから，自宅から最も近い公園までの道路距離と，公園利用度合（週に3～4日以上利用する児童の比率）との関係を図化してみると，3年生では距離が明白に利用を規制しているが，6年生では距離が400～500 m以内の範囲ではそのような関係はみられない (Fig. 5)。従って，小学高学年児童の利用にあっては距離が一定範囲内であれば，遊び場の質的条件がより大きな意味を有するものと考えられる。

なお，戸外遊びの時間，友達，場所の3条件と，遊びに対する意欲との間にはそれほど大きな関連はみられないが，現状不満層は遊び時間がより少ないと感じ，遊び場も近くにないと答える比率がやや高い傾向がみられる (Fig. 4)。

さらに，戸外遊びを制約する条件をより具体的に知るために，戸外遊びが「週1～2日以下」と答えた児童に，あまり遊ばない理由を直接尋ねると（10項目より1項目以上選択），「テレビ視聴や屋内での遊びの魅力」が圧倒的に多く，「塾，けいこ事による時間的制約」が2位に，以下「遊び友達がいない」「遊びたくない」がほぼ同比率で続いている。ここで，遊び場に関しては「遊び場所がない」は5%と少ないが，「公園などの遊び場は面白くない」は14%と第5位にあげられている (Fig. 6)。

戸外遊びにとって，時間や友達の存在が重要であることは既述のとおりであるが，屋内での遊びやテレビ視聴

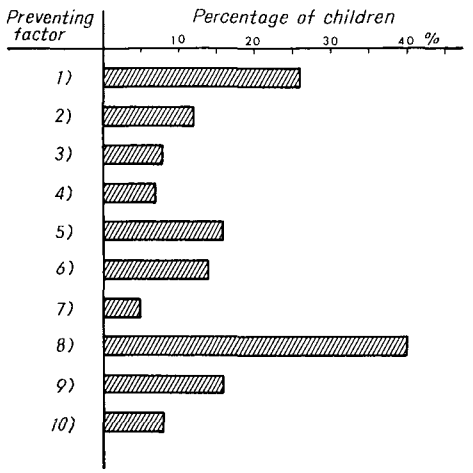

Fig. 6. Factors preventing more frequent outdoor activity (in the case of children who play two or less days outdoors in a week).

Note. 1) Extra auricular school and other private lessons. 2) Extra curriculum. 3) Helping parents. 4) Study at home. 5) Lack of playmates. 6) Not interested in parks and other playgrounds. 7) No space for playing. 8) Indoor play (T. V., radio etc.). 9) Lack of interest to play at outdoors. 10) Other response.

が大きな競合要因となっていることにもにも注意が払われるべきであろう。この調査が行われた11月は気温も低く，戸外遊びの少ない時期であり，屋内での遊びがより強く現われていると思われるが，「公園などの遊び場は面白くない」の比率の高さとあわせ考えると，基本的には公園を中心とした戸外遊び場の魅力を高めることが極めて重要であるといえる。

ここで，戸外遊びの度合の弁別に，性，学年，校区がどのように関与しているかをより明確に示すために数量化第II類による分析を行った。

弁別の精度を表わす相関比はそれほど高くはないが，第1軸においてよく遊ぶ層とあまり遊ばない層を明解に分けている（カテゴリー別の平均スコアー「週5～6日以上」−0.299，「週3～4日」0.186，「週1～2日以下」0.585）(Table 2)。この弁別には校区に比べて性，学年が大きな影響を有し，その強さは同程度である。また，カテゴリー別スコアーから男子に比べて女子に，学年では高学年に遊びの度合が少なくなる傾向がみられ，既に述べたクロス集計による結果に対応している。

2. 戸外の遊び場の種類

ふだん最もよく遊んでいる場所を予め用意した項目か

Table 2. The factors which affect children's outdoor playing activity and the degree of the effect

Item	category	N	Score*	Partial correlation
Sex	m	706	−0.673	0.265
	f	611	0.778	
Grade	3	333	−0.842	0.248
	4	327	−0.170	
	5	349	0.015	
	6	308	1.073	
School area	Kitazono	292	−0.339	0.099
	Kosai	303	−0.088	
	Koto	298	−0.015	
	Makomanai	297	0.428	
	Bankei	42	−0.058	
	Tokiwa	85	0.059	

Correlation ratio η: 0.355.

* Numeric values assigned to item categories.

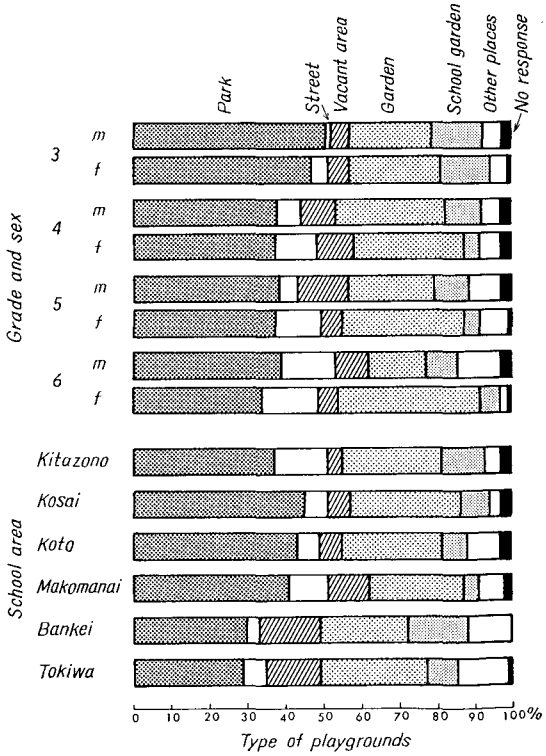

Fig. 7. Type of playgrounds by sex, grade and school area.

ら選択させると Fig. 7 が示すように，全体では「公園」40% が1位で，「庭」27% が続き他はかなり少ない。

性，学年別にみると，男子に「校庭」，女子に「庭」，3年生に「公園」がそれぞれ相対的に高率となっており，校区別では，郊外に位置し「公園」が少ない盤渓，常盤両地区で「空地」「その他」が多くあげられ環境の相違を反映している。

児童公園が配置されていない盤渓地区においてもかなり高い比率で「公園」があげられているのは，比較的近距離に位置する円山公園の利用や，校区外からの通学児童による影響と思われる。一方，公園配置に最も恵まれた真駒内地区にあっても「公園」の比率が特に高い傾向はみられず，むしろ，公園が少ない幌西，幌東両地区で高率となっている。このような校区による特性とその原因に関しては，遊び環境としての地区評価に基づき，さらに検討を要するものと思われる。

これらの遊び場までに要する時間は，全体では「0～1分」36%，「2～3分」27%，「4～5分」18% と 80% 以上が4～5分以内となっており，性，学年別にも大きな差異はみられない。しかし，男子では約半数が自転車を利用しているのに対して，女子では約30% 程度にすぎず，自転車利用が行動圏に影響していることが推察される。

3. 遊び場に関する不満

現在の遊び場に対する満足性を尋ねると，全体では「十分満足」12%，「まあ満足」26%，「やや不満」23%，「非常に不満」7% と満足層が不満層を上まわっている。

しかし，学年別にみると高学年で不満が多く，6年生では不満層が満足層を越えており，この傾向は女子よりも男子により強く現われている。また，校区別にも一応有意な差がみられるがその理由は明らかではない (Fig. 8)。

ここで，戸外遊びの度合・意欲との関係では，あまり遊ばない層よりもよく遊んでいる層に満足と答える率がやや高いようであるが，その差は小さく，むしろ，「もっと遊びたい」とする遊びに対する意欲のある児童に不満が強いことが注目される (Fig. 9)。これは，不満が遊び場の現状と遊びに対する欲求との関係で生じ，欲求が顕在化しなければ不満も顕在化しない傾向があることを意味する。

校区別の相違を調査 II によって3年生，6年生，父兄別に示すと Fig. 10 のようで，全般的に3年生よりも6年生に不満が多いのは調査 I と同様であるが，3年生，父兄において校区差が著しいのに対し，6年生ではその

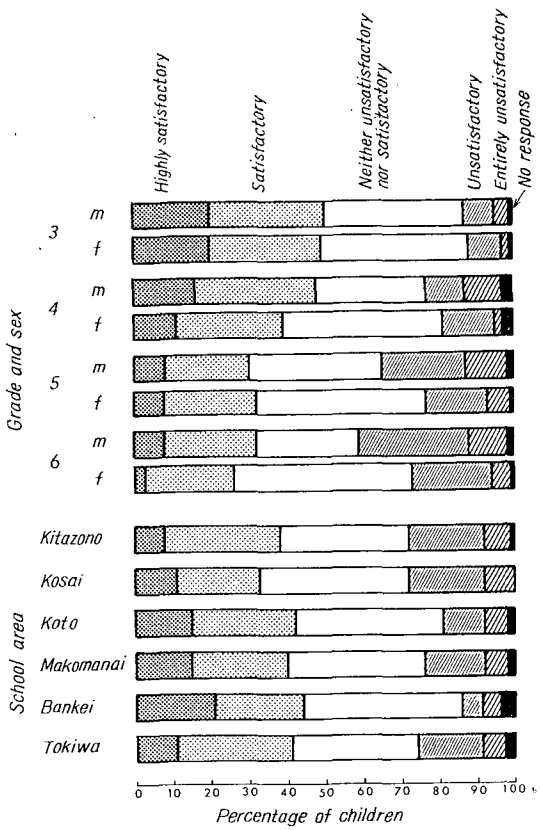

Fig. 8. Degree of the satisfaction for playground by sex, grade and school area.

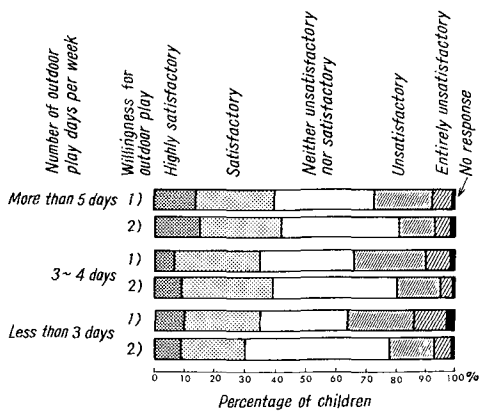

Fig. 9. Relation of degree of satisfaction regarding playground to playing activities.

Note. 1) Want more play time outdoors.
2) Satisfied in the present state.

差が非常に小さくなっていることがわかる。これは，3年生の不満が地域の遊び場に関する物理的環境条件の相違により多く左右され，父兄もまたそのような条件を不満に反映させているが，6年生にあっては各地域に共通した大きな不満要因が存在していることによるものと推察される。

次に，不満内容を詳しく検討するため，調査IIにおいては予め用意した不満項目 (Fig. 11) からの多肢選択，調査Iにおいてはほぼ同様な不満項目についてそれぞれ独立して不満の有無や度合を調べた。

調査IIによる不満比率は Fig. 11 に示すとおりで，性，学年をとおして「狭い」「遊戯施設が面白くない」「スポーツの設備や場所がない」「自然がない」などが大きな不満要因となっている。特に，6年生では「自然が

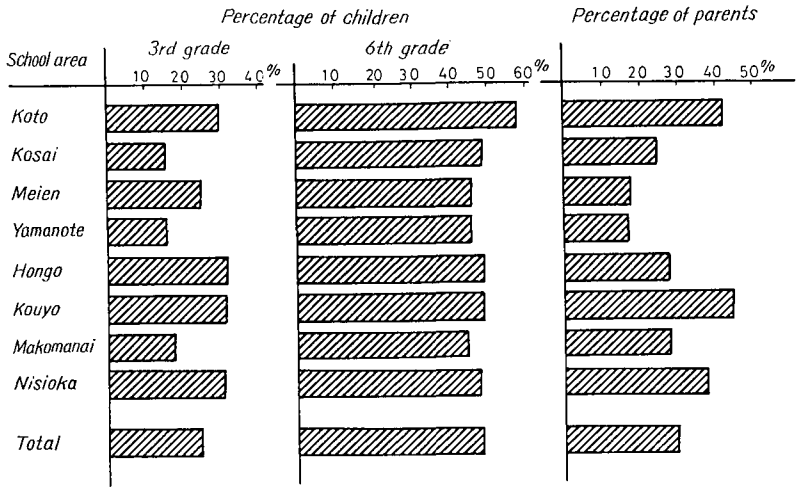

Fig. 10. Percentage of children who reply 'entirely unsatisfactory' or 'unsatisfactory' regarding playgrounds by school area, grade of children and parents.

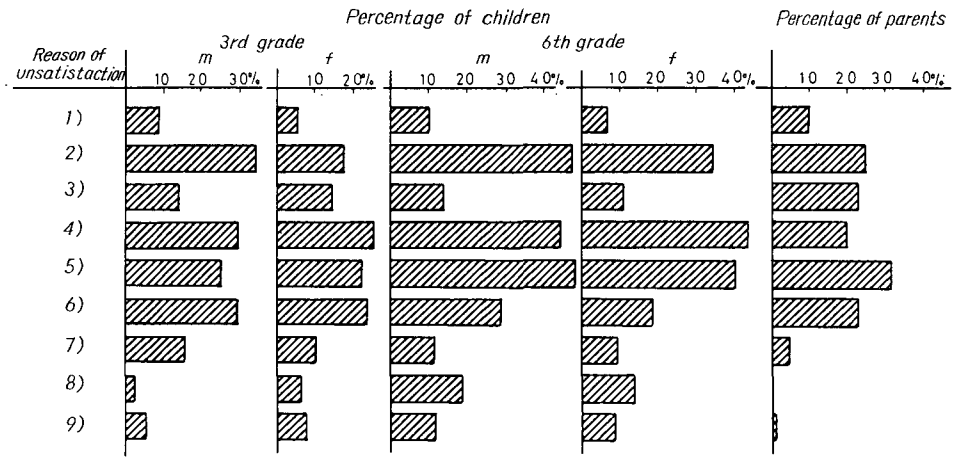

Fig. 11. Reason of unsatisfaction regarding playgrounds by sex, grade of children and parents. (percentage of sample who reply 'entirely unsatisfactory' or 'unsatisfactory' regarding playgrounds by survey II)

Note. 1) Too far. 2) Too small. 3) Danger posed by traffic. 4) Not interested in playing facilities. 5) Not enough space and facilities for play. 6) No water, trees etc. 7) Inteference by adults or other children. 8) Do not have enough time. 9) Other response.

ない」を除く前3要因に不満が集中している。

父兄においては，これらの4条件に加え，自動車による危険性が多くあげられいるのが特徴である。

調査Iによると，近くに遊び場があるかどうかに関しては既述 (Fig. 3) のとおりで，その他の項目は Fig. 12 に示した。

「遊び場へ行く途中の危険性」では約30%が危険性があると答え，学年別による相違はほとんどないが，性別では男子にやや多く，校区別による差もみられる。

「遊び場の広さ」と「スポーツをする設備や場所」に関しては，女子よりも男子に，また高学年において一層不満が多くなる傾向が顕著で，校区別にもそれぞれ有意な差がみられる。

「遊戯施設の面白さ」では高学年に「面白くない」と答える比率が高く，3年生では性別による差はないが，5, 6年生になると男子に不満が多い。

「自然 (水・草・樹木・その他)」については，全体で40%以上が「ほとんどない」と答え，性，学年別の差は明確ではないが地区環境を反映して校区による差が大きい。

「遊び場で危ないと思うこと」は，「たまにある」と「よくある」を加えた比率が60%に近く，「大人や他の子供による遊びの障害」も50%を越え，女子に比べて男子に多く，校区差も大きい。この具体的内容は曖昧であるが，公園での聞き取り調査によると“野球などの球技に際して幼児の遊びが危ない”という声が多く，スペースの狭さからくる異なる年齢層間の利用競合が大きな問題となっているように思われる。

「遊び場でのゴミや汚れ」に関しては約50%が「感じるときがある」と答え，女子においてより敏感である。

ここで，地区環境の相違に基づくと考えられる校区差は全項目で有意であったが，特に，「自然 (水・草・樹木・その他)」では校区差が大きく，郊外に位置する盤渓，常盤の両地区及び丘陵や大公園に近い真駒内地区では当然ながら「ほとんどない」とする比率は低い。しかし，これらのうち，盤渓，真駒内の各地区でも約35%が「ほとんどない」と答えており，その自然の特性と子供達との触れあいの度合や方法などがどのようなものであるかが問題である。

「大人や他の子供による遊びの障害」では旧市街地の各校区で比率が高く，土地利用状況や遊び場の利用密度が関連しているものと考えられる。また，この項目は調査IIに比べて不満比率が著しく高いようにみえるが，質問文や質問型式による影響が大きいと思われる。

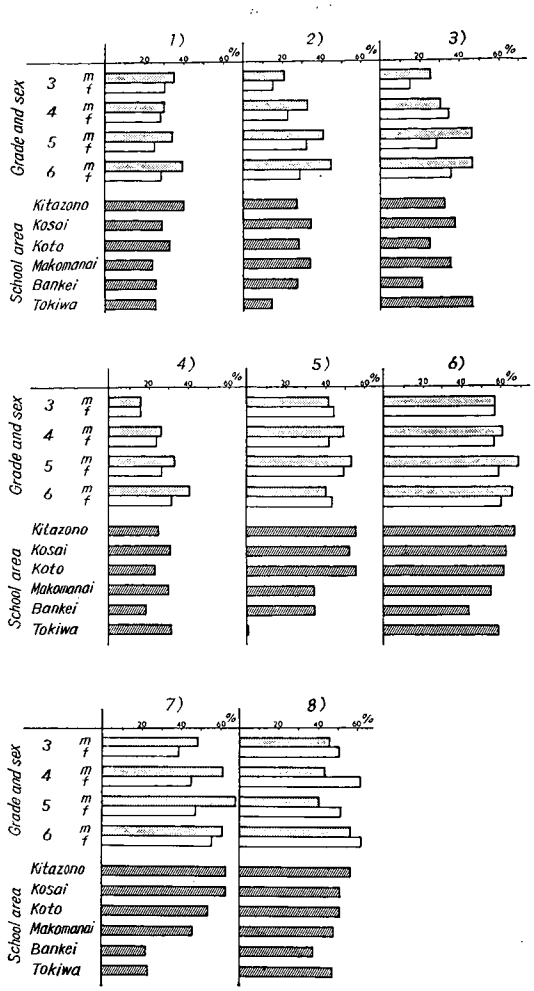

Fig. 12. Reason of unsatisfaction regarding playgrounds by sex, grade and school area.

Note. 1) Percentage of children who felt danger by traffic. 2) Percentage of children whose response was 'playgrounds are too small'. 3) Percentage of children who are unsatisfied of the facilities or space for sports. 4) Percentage of children who are not interested in facilities. 5) Percentage of children who felt 'nature (water, grass, tree, etc.) had been lost'. 6) Percentage of children who felt their playing activities were curled by adult or other children. 7) Percentage of children who felt danger at playgrounds. 8) Percentage of children who felt playgrounds were not clean.

以上のような性，学年，校区が遊び場に関する各不満にどの程度の強さで関与しているかを数量化第II類による分析で調べた。なお，外的基準として用いた各要因

Table 3. The effect of three factors (sex, grade, and school area) upon children's unsatisfaction of playgrounds

	Distance from home	Any danger on the way to playgrounds	Size of the playgrounds	Regarding facilities or space for sports	Attractiveness of playing facilities	Nature (water, grass, trees etc.)	Interference by adults or other children	Any danger at playgrounds	Cleanliness	Total
Sex	0.103	0.073	0.116	0.054	0.032	0.027	0.136	0.073	0.099	0.061
Grade	0.024	0.051	0.169	0.205	0.216	0.054	0.118	0.098	0.107	0.217
School area	0.128	0.133	0.105	0.124	0.097	0.513	0.243	0.122	0.081	0.102
Correlation ratio	0.166	0.159	0.231	0.248	0.243	0.516	0.299	0.173	0.161	0.250

は Table 3 に示すとおりである。

分析の結果，いずれも第1軸で正負の両評価を弁別し，その規定度合は偏相関係数，判別の精度は相関比で示される (Table 3)。

「遊び場までの距離」「遊び場へ行く途中の危険性」「遊び場で危ないと思うこと」「ゴミや汚れ」などは，他の項目に比べて相関比が小さく，性，学年，校区の3要因による精度が低い。また，「遊び場の広さ」「スポーツをする設備や場所」「遊戯施設の面白さ」などでは学年，「遊び場へ行く途中の危険性」「自然 (水・草・樹木・その他)」「大人や他の子供による障害」「遊び場での危険性」などでは校区による規定度合がそれぞれ高いことが特徴的である。

このような分析結果はクロス集計による結果にほぼ対応しているが，各要因の影響力を数量によってより明確に知ることができる。

特に注目されるのは「遊び場までの距離」において校区差が比較的小さいことや，不満要因として多くあげられていた「遊び場の広さ」「スポーツをする設備や場所」「遊戯施設の面白さ」などにおいて，学年による相違が校区による相違よりも大きいことなどである。

ここで，主要な不満要因である「遊び場の広さ」「スポーツをする設備や場所」「遊戯施設の面白さ」と戸外遊びの度合・意欲との関連をみると，遊び場全体に対する場合と同様で戸外遊びの多少による差はほとんどないが，もっと遊びたいとする戸外遊びに積極的な層に不満が強い傾向がみられる。

次に，これらの各不満要因が遊び場全体の満足性にどの程度関与しているかを数量化第II類によって分析した。外的基準としては，遊び場に対する全体的満足性について「十分満足」，「まあ満足」，「普通」・「無記入」，「やや不満」，「非常に不満」の5カテゴリーを用い，各不満要因のカテゴリーは2～3ランクに分けた。

第1軸は明確に満足—不満足層を分けており相関比も高い ($\eta=0.631$)。偏相関係数によって各要因の弁別への寄与の大きさをみると，「スポーツをする設備や場所」が最も大きく (0.325)，「遊戯施設が面白くない」(0.268)「遊び場の広さ」(0.214) が続き3大不満要因となっている。

性，学年別 (3・4年男子，同女子，5・6年男子，同女子) に同様な分析を行うと，5・6年 (男，女) 児童において「スポーツをする設備や場所」「遊戯施設の面白さ」などがより強く，また，3・4年 (男，女) では「自然 (水・草・樹木・その他)」が，3・4年女子では「遊び場での危険性」が，5・6年女子では「遊び場へ行く途中の危険性」「遊び場でのゴミや汚れ」などが相対的に強く影響しているようであるが大きな相違はみられない。

このような結果は，クロス集計によって示した結果にほぼ対応している。

戸外遊びの度合，遊び場に関する不満等を通じて考察すると，この調査においても戸外遊びの度合には単に遊び場の不足ばかりでなく，遊びを可能にする自由時間や友達の存在が大きな影響を有していることが明らかで，小学高学年での戸外遊びはかなり少なくなっており，戸外遊びに積極的な層と戸外遊びが少なくても満足している現状肯定的な消極的な層が分かれているようにみえる。

小学高学年児童にとって遊び場に対する最も大きな不満は，スポーツ (男子では主に野球) ができる“広さ”であるといえるが，これは直接的には「遊び場の広さ」「スポーツをする設備や場所」に対する不満として，間

接的には「遊び場での危険性」「大人や他の子供による障害」などの比率によっても明らかである。また，既存の児童公園における施設に対する不満と考えられる「遊戯施設が面白くない」と答える比率も高い。

遊びたいという意欲はあるが，あまり遊ばない児童にとっては，遊びの時間，友達の存在等による影響が大きいと考えられ，戸外遊びを可能にする状況の設定が重要となってくる。

一方，戸外遊びに消極的な層にとっては，屋内での遊びやテレビ視聴が大きな比重を占めていると考えられ，戸外遊びの魅力によって潜在化している欲求を引き出すことが大切である。

本調査においては比較的公園配置に恵まれた地区が多く含まれていることや，幼児に比べて遊び場までの距離による制約が少ない小学3年生以上を対象にしていることもあって，遊び場の存在自体に関する不満はそれほど大きくない。

今後の公園計画にあっては，戸外遊びに積極的な層にはグループでの遊びやスポーツが十分にできる近隣公園もしくはそれに代わる少年公園の整備や学校運動場の開放などが重要であり，消極的な層にとっては魅力ある遊び場づくりが重要で，その1つとして遊び友達ができ易く適切なプレイリーダが存在し，多様な体験を可能にする冒険公園 (adventure playground) の設置が効果的であろう。

摘　要

児童の遊び場計画に関する基礎的資料を得る目的で，戸外遊びや戸外遊び場に関する満足性を質問紙法により調査した。

主な結果は次の如くである。

1) 戸外遊びの度合は性，年齢によって有意な差がみられ，自由時間の量や友達の有無が大きな影響を有していた。

2) 子供達は，戸外遊びの度合や戸外遊びに対する意欲によって，消極的な層と積極的な層の二つのグループに分けられた。

3) 遊び場に関する不満として，「遊び場が狭すぎる」と「遊戯施設が面白くない」という答えが非常に多くみられた。

4) この調査から，特に，戸外遊びに積極的な層にはスポーツ活動を可能とする遊び場，消極的な層にはより魅力的な遊び場の整備が重要であると指摘できる。

謝　辞

本研究を行うに当り御指導と校閲を賜った北海道大学明道博教授に謹んで感謝の意を表する。また，調査に際して多大な御協力を戴いた札幌市役所公園計画課，各小学校の各位に深謝する。計算はすべて北海道大学大型計算機センターにおいて行われ，プログラムパッケージ SPSS を用いた。

引用文献

1. 井口尚之・他編： 遊びの心情，p. 57–77. 明治図書，1969
2. ダットナー，R.（神谷五男・松代真理訳）： 遊び場の計画，p. 37–53. 鹿島出版会，1977
3. 藤本浩之輔： 子どもの遊び空間，p. 11–245. 日本放送出版協会，1974
4. 札幌市緑化推進部： あそび場に関する調査報告—児童公園—，p. 133–187. 1978
5. 指定都市教育研究所連盟編： 現代の子どもの意識と行動，p. 9–27. 東洋館出版社，1979

Summary

The present study carried out in such a way as to pertinent factors for planning and designing of playgrounds. A questionaire survey was carried out to determine the factors which had influences on children's outdoor activity and on the general satisfaction rate with the present state of playgrounds. The major findings are as follows:

1) The result showed a significant difference in the frequency of outdoor play between sexes and among ages and also showed the importance of free time and friends that present state of affairs allow.

2) The children were divided two groups by the frequency of outdoor play and their will to play; the first group was passive and the second was active.

3) A great number of the children replied that the space size of existing playgrounds was too small and the equipment was inadequate.

4) Stemming from the survey, we can point out the importance of a large playgrounds for sports activity especialy for active children and of a more attractive playgrounds for passive children.